

■活動レポート

おつとうち
陸前高田市越戸内遺跡(仮称)の発掘調査

専門学芸員 羽柴直人 (考古部門)

岩手県立博物館考古部門では、岩手県教育委員会の委託により平成12年度から、「前平泉文化調査事業」として県内の平泉及び、その前段階である安倍氏・清原氏関連の遺跡発掘調査を実施してきました。これまでの調査は、奥州市衣川区衣川流域や江刺区人首川流域など、内陸部の調査を中心におこない、一定の成果をあげてきました。

本事業に限らず、岩手県内における平泉関連の考古学的研究は、その対象が平泉を中心とした内陸部に偏っており、三陸沿岸部の発掘調査、考古学的研究は手薄な状況です。平泉文化の様相の具体的な解明には、沿岸部の考古学的研究も不可欠と考えられます。また、3月に発生した東日本大震災により沿岸部の市町村は大きな被害を受け、埋蔵文化財包蔵地への被害も推測されます。このような状況から、今年度の調査は、沿岸部気仙地区を対とし、陸前高田市矢作町越戸内に所在する「塚」の発掘調査をおこなうこととしました。

陸前高田市矢作町字越戸内地内では、平地に張り出す尾根の突端付近で、昭和3年(昭和13年との説もある)頃、石積みの中から陶器の壺が発見されています。壺は渥美窯産(愛知県渥美半島付近)で、12世紀前半頃の製品です。類似する製品は平泉でも多数出土しています。経文は残っていなかったようですが、この

壺は中に経文を納めて塚に埋納したもので、石積みは「経塚」と推測されています。石積みはその後の神社造営などで、痕跡を留めておりませんが、現在のところ、この「越戸内経塚」が気仙地方において、平泉時代と直接関係する考古学的資料として唯一のものです。

発掘調査対象とした「塚」は、「越戸内経塚」から尾根の稜線を上方(北側)へ約135m上った標高約60mの地点に所在します。土地所有者のご教示と現地踏査により、「塚」の所在を新規に確認することができました。調査前の計測では、直径約5m、高さ約90cmを測る規模で、所在位置から「越戸内経塚」との関連性を想定でき、12世紀平泉時代の「経塚」、またはその関連遺構との予想を立て調査を開始しました。

発掘調査は23年10月3日(月)から12日(火)までおこないました。塚の形状を壊さないように、幅50cmのトレンチを塚の中心部で直交するように十文字に設定し、掘り下げをおこないました。トレンチは塚を造成した旧表土の下まで掘り下げをおこないましたが、経容器や、石室、その他の埋納物は出土しませんでした。また、掘り下げ調査の結果、塚の周囲に上幅約1mの周溝が巡ることがわかり、盛土の土層断面の観察と合わせ、明らかに人為的に造成された塚であることが確認されました。

調査した塚については出土遺物や埋納物がなく、個別の時期・性格の特定は難しい状況ですが、上述の越戸内経塚や、調査地点の南西250mには平安時代に遡る可能性の高い十一面観音像が安置される観音寺観音堂、尾根を下った南200mには「寺跡」と伝承される平坦地も所在し、周囲が平泉時代に遡る寺域、霊場であったことが伺えます。伝承される寺跡は近世の地誌(矢作村安永風土記)から寺号を「西光寺」と伺い知れます。この状況から、調査した塚も仏教信仰に基づくもので、造成が平泉時代に遡る可能性も検討すべきと考えます。

さらに今回の調査地点から視点を気仙地方全域に広げ、越戸内経塚の周囲の寺院の位置、性格付けから、平泉時代の気仙地方の在地有力者であった「金氏」の権力中枢の所在地究明へと研究を進展させていきたいと思えます。

調査にあたっては地権者の桜田さん、作業員の方、市立博物館OBの方、市教育委員会など、陸前高田市の多くの方々に大変お世話になりました。地域の歴史を掘り探る「発掘調査」も、復興の一助に成り得る活動と考えます。地域の未来を設計するには、地域の来歴を知る必要があるからです。今後も、沿岸部を対象とした考古学的研究を深めていきたいと考えております。



越戸内経塚と調査した塚が位置する丘陵(東側から撮影)



調査状況



塚調査終了状況 人が立つ位置は周溝部